

第4回 社会教育委員会議 議事概要

1 議事

(1) 出口議長挨拶

(2) 報告事項

ア 令和8年度札幌市教育費予算について

イ 地域学校協働活動推進事業

令和7年度実施状況及び令和8年度実施方針について

ウ 前回会議の振り返り

(3) 協議事項

令和7年度協議テーマ「第4次札幌市生涯学習推進構想に向けて」

第4回熟議テーマ「現状と課題を踏まえ4次構想に期待すること」

(4) 連絡事項

2 日時

令和8年(2026年)3月10日(火)10時00分～12時00分

3 場所

札幌市教育委員会(S T V北2条ビル)4階 委員会会議室

4 出席者

(1) 委員(出席9名)

船着委員、齋藤委員、中野委員、今泉委員、桑原委員、

榊委員、細川委員、片岡委員、出口委員

(2) 事務局(9名)

井上総務部長、新津生涯学習推進課長、

早坂生涯学習係長、上原社会教育担当係長

大山職員、荒木職員、佐藤(景)職員、野上職員、橋本職員

5 開催形態

公開(マスコミ関係者:北海道通信社1名)

6 会議内容

【配布資料】資料1-1:局別施策の概要

資料1-2:社会教育関係団体への補助金の交付について

資料2:地域学校協働活動推進事業

令和7年度実施状況及び令和8年度実施方針について

資料3-1:第3回社会教育委員会議 議事要旨

資料3-2:第1~2回社会教育委員会議 議事要旨

資料3-3：アンケート調査報告書（概要版）

資料3-4：議事要旨と市民アンケート調査結果の整理表

(1) 出口議長挨拶

(2) 報告事項

①令和8年度教育費予算について

ア 事務局より、資料1-1及び1-2を用いて説明。

イ 主な質疑応答

・文科省では「校内教育支援センター」の配置を推進するという方向性があるものの、予算や人員措置は為されていない状況と理解しているが、こういったスクールカウンセラー等の活用の流れが支援センターの活用や、その人材の確保といったものにつながっていくイメージはあるのだろうか（今泉委員）。

→校内支援センターを配置するためのスペースとして空き教室を活用することはあり得るが、現状では常駐による対応が出来る状況にない。例えば、相談支援パートナーが子どもの見守りを行うにしても、時数の関係で半日しかいられないということが度々あるため、各校で工夫しながら対応を進めているというのが実情である（井上部長）。

→小学校では別室のないところが多いという現状があるかと思うが、福祉・心理の専門家が関わることで、子どもたちの学びを保証できるといように思っている（今泉委員）。

・学校図書館地域開放事業について、図書館が1階にある学校は比較的地域の方々が入りやすいように思うが、図書館が上の階にある学校の場合であっても実際の利用は進んでいるのだろうか。次に意見となるが、スクールカウンセラーが年度ごとに変った際、利用者が都度これまでの経緯等を繰り返し説明しなければならないという話を聞いたことがあるため、内部での連携に関するシステムが確立されれば良いと思う（齋藤委員）。

→市内小中学校合わせておよそ300校あるため、情報共有については差が出ている部分もあると思われるため、きちんと確認しながら進めていきたい（井上部長）。

→本校は開放図書館を設置しているが、ボランティアの方々ほぼ毎日図書の整備や貸出・返却対応をしてくれている。地域開放については、土日の特定の日について案内を行っている状況。利用者については完全に把握していないが、保護者が多いように思う。また、校内教育支援センターについても本校には設置しており、時間の限りはあるものの相談支援パートナーに対応いただいている。スクールカウンセラーは概ね3年程で変わるものと認識しているが、人の入れ替わりによって状況が好転することもあり得るため、情報の引き継ぎをしっかりと行っていれば、いい面もあるように感じる（船着委員）。

・スクールカウンセラーについて、人材不足ということもあり大学でも養成しているところだが、資格取得のハードルであったり6年間の課程という部分から大変だと思う。札幌圏の私立高校において看護師の配置を始めている学校もあると聞くが、試行的にでも採用したことはあるだろうか。心理的よりは身体的なことが中心

になると思うが、医療のプロとしてできることも大きいのではないかと思い、質問したところ（片岡副議長）。

→現在、看護師の方々に関わっていただいているのは特別支援学校や医療的ケアを要する子どもたちのいる学級であり、そういった所には非常勤ではあるものの配置している状況。予算面がネックとなるが、貴重なご意見としていただきたい（井上部長）。

②地域学校協働活動推進事業令和7年度実施状況及び令和8年度実施方針について

ア 事務局より、資料2を用いて説明。

イ 主な質疑応答

・資料2には事業実施校の実績が記載されているが、札幌市の学校全体に対する実施率としてはどれくらいの数値となっているのか。また、全国的な地学協働の実施率はどれくらいなのだろうか。コミュニティスクールについては、来年度導入率が74%に増加するとのことであったため、地学協働としても何らかの動きがあるか確認したい（中野委員）。

→札幌市の実施率として正確な数値は把握していないが、市内小中学校がおよそ300校あるため、そこから計算は可能である。全国の実施率についてはすぐにお答えできないが、文科省のHPには掲載されているところ。コミュニティスクールの実施率と地学協働の実施率は同じになる訳ではないが、双方の一体的推進が求められている現状においては、コミュニティスクールの増加に連動して地学協働も増加する傾向にあるものと認識している（上原係長）。

・今、手元で調べてみたが、令和7年度の地学協働実施率は全国の公立学校で66.9%、小・中・義務教育学校においては77.4%とのこと。コミュニティスクールについては、全国の公立学校で64.9%、小・中・義務教育学校では71.6%とのことで、概ね3分の2程度の学校で取り組まれているという状況かと思う（出口議長）。

・先日、校長先生を対象とした令和8年度の教育方針説明会が行われたところだが、その中で教育長から「子どもは、学校も含む地域という大地の中で育てられる」といった講話があり、自分自身としても、学校だけで全てが完結するのではなく、地域の皆様の力や考えを吸収し、支えてもらいながら学校という場で子どもを見守り育てていくということが大切であると改めて実感したところ。我々としても、何故こういった制度が必要なのかを学校管理職の皆様にご理解いただいた上で進める必要があると考えている（井上部長）。

③前回会議の振り返り

事務局より、資料3-1及び3-2を用いて説明。

(3) 協議事項「第4次札幌市生涯学習推進構想に向けて」について

○熟議

今回も2グループに分かれて、熟議を行う。最後に熟議の内容を各グループでまとめた上で発表し、全体で共有する。（出口議長）

(ア) グループ構成

- ・ 出口議長、今泉委員、船着委員、中野委員
- ・ 片岡副議長、細川委員、齋藤委員、桑原委員、榊委員

(イ) 熟議テーマ

「現状と課題を踏まえ4次構想に期待すること」

→第1～3回会議で協議した内容や「ちえりあ」の視察を通して浮かんだ「札幌市の生涯学習の現状」や「札幌市第3次生涯学習推進構想における課題」を踏まえ、課題解決に向けた具体的な提案や改善策のような「4次構想に期待する内容」について議論する。

(ウ) 生涯学習に係る市民アンケート調査と議論の整理

議論に先立って事務局より、資料3-3及び3-4を用いて、生涯学習に係る市民アンケート調査結果の分析やこれまでの議論における論点の整理について説明。

(4) 協議事項（熟議概要）

ア 出口議長班

・ アンケートの結果にも表れていたが、自宅で学ぶ環境の整備について、オンライン化や開催時間の調整が可能なのではないかと思います。自身がこれまで働いてきた中では、こういった講座があることを知らなかった。今は社会教育に携わりながら、様々なセミナーやイベントの存在を知ったが、サラリーマンの時にこういうものに参加できたかと考えると、恐らくできなかったと思う。現在はパソコンを使える人も多いため、オンラインを用いたハイブリッド形式での開催や、夕方の時間帯での開催があればいいように感じている（中野委員）。

・ 夜間にちえりあから講座を発信することは厳しいと思うが、例えばご近所先生講座を増やして夜の部を作ったり、ちえりあだけでなく身近な施設に展開しオンライン講座も実施すれば、学習の機会は増えていくように思う（出口議長）。

・ アンケートの声にもあったとおり、現役世代や子育て世代の方々は、学びたい気持ちがあっても時間的余裕がないという状態であるため、自宅やオンライン、オンデマンド形式などで時間や場所を問わずに学べるのではないだろうか。時間を限定してしまうと難しい方が多いため、人々が参加しやすい仕組み作りが、生涯学習や社会教育を広げていくことにつながるのではないかと思います（船着委員）。

・ 若い方々や子どもたちは、生涯学習という言葉をあまり知らないと思う。基本施策1が「学びを生かして未来を想像する人づくり」であるならば、やはり子ども・若者世代に生涯学習の定義や、学校教育以外も学びであることの周知に期待したい。学びについての意識が小さい頃から変化したり、学校以外での学びに気づくと、興味関心のあるところや多様な学びのスタイルが増えていく。それによって、その子らしい生き方や人格形成にも波及していくのではないかと期待している（今泉委員）。

・ どんな活動があって、どんなことを学べる機会があるのか、それらの情報を発信する何かがあればいいと思う。現代ではインターネットやSNSでもいい。我々はちえりあを視察して実際の活動を知ったが、ああいう機会はまずないものと思われるため、学習する機会に関する情報がどこかにあれば興味をもつ方も増えると思う。子どもの視点で言うと、学校以外の方が何かを教えてくれる習い事自体が一つの社会教育ともいえるが、それを社会教育だと意識していないということだと思う。学校を離れたときに学びが止まってしまう方へ向けた情報発信を強化していくいいように感じた（船着委員）。

- ・ネットの情報は、自分から見に行かないと届かない（出口議長）。
- ・SNSでもいいかもしれない（船着委員）。
- ・紙や新聞であれば、全体に書いてある様々なことが頭に入ってくるが、ネットはあくまでも検索などで自分から見に行かなければならないというハードルがある（出口議長）。
- ・今であれば、札幌市の公式LINEで様々な情報が届くため、それらは割と見やすいと思う（船着委員）。
- ・情報発信の手段について、市民の方々と対面で接している民間はNPO法人含め結構あるように思う。例えば、市の行政サービスの案内を民間の職員が行うような実例もあると聞いているため、子育てや健康等のジャンルに応じて施設やイベントの情報を発信するような、より理解を深めてもらうための手段として民間やNPOを活用するのも一つではないかと思う（中野委員）。
- ・委託された企業が行っているのか（船着委員）。
- ・市と連携協定を結んでいる企業が行っているようである（中野委員）。
- ・先日、ある大学の取組について話を聞く機会があった。地域と調整し用意した複数の活動場所に学生たちを送り出し、地域の方々と連携して街の活性化に寄与するという取組であるが、その中に広報に注力するグループがあったという。その学生達は将来的にメディア関連の職業に就きたいと考えており、活動の撮影や動画の編集、SNSの運用やチラシ作成まで幅広く行っていたとのこと。そのような広報活動を好んだり、機材を扱うのが好きな人たちでグループを作り、広報活動を進めていけばいいのではないだろうか。本人たちは好きだからこそ行動していたり、将来そういう職業に就きたいからこそ行動している（出口議長）。
- ・専門学校に進学する予定の高校生が、アルバイトとして歯医者さんの広報TikTokを編集し、プロと遜色ないような出来映えになっていることを考えると、今の若い方々は得意なのかもしれない（今泉委員）。
- ・もはや年齢は関係ないのかもしれない。ご高齢の方でも、若い世代でも、そういうことが好きな人にやってもらえればいい（出口議長）。
- ・ちえりあの研修講座の動画をグループで編集してもらい、発信していくようなイメージ（今泉委員）。
- ・そういった動画を見る側の方々が、たどり着けるかどうかというところ。見られる世代は多くなっているかと思うが、紙媒体の需要もあるため、そういった方々へもしっかり情報を伝えなければならない（船着委員）。
- ・全員が全員SNSをやっている訳ではないため、そういう人からすると疑問を抱かれる気もしない訳ではない（出口議長）。
- ・ただやはりオンラインは機会の均等につながるように思う。アンケート回答の年代の偏りから考えても、現役世代より若い方々が生涯学習や社会教育を知らないまま大人になり、それから時間の余裕がある時に学ぼうとするのは、凄くもったいないと感じる。オンラインを活用して学習の機会を均等にし、そこから対面の学習につなげて地域づくりやリアルの人間関係、支え合いに発展していけるような仕掛けが4次構想で出来るといいようなイメージをもった（今泉委員）。
- ・最近、編み物がきっかけとなりネット上で知り合ったグループが、実際に集まって対面で編み物をするというニュースを見かけた。このように、オンラインをきっかけに実際に集まってつながりが出来たというのは驚いた。アンケートでは若い世代の声が集まりにくかった部分もあるかと思うので、色んなニーズを集められるよう工夫してもいいのかもしれないと感じた（船着委員）。
- ・ちえりあへのアクセスを考えると、近所の方々が中心になると思う。市民の方々

が平等に、公平に学習の場を確保すると考えると、ちえりあほどでなくとも各区にハブのような役割をもつ施設が求められるのではないだろうか（中野委員）。

- ・予算規模的には、実現可能なのだろうか（今泉委員）。
- ・施設自体はあるので、後は職員配置の問題だと思う。少なくとも、ご近所先生講座のような取組は各所でやってもらいたい気がしている（出口議長）。
- ・高原委員も過去の会議で仰っていたと思うが、学んだ人が教える側になるという持続可能な社会を作っていくためには、その担い手として社会教育士やボランティアといった人材を育成し、地域の中でコーディネートしながら様々なニーズに応えられるような事業ができれば良いように思う（中野委員）。
- ・私も同意見。学んだ成果を活かさなければもったいない。発揮する場をどう作っていくかが大事になると思う。ニーズをもつ人と場のマッチングであったり、発揮する場を上手く広報するといった流れになるのだろうか（出口議長）。
- ・情報を得た人がそのままニーズをマッチングさせられるような、双方の役割が一体となっていけばより良いと思う（船着委員）。
- ・全体をファシリテートできる人材が必要だと思う。各区でそのような人材が活躍することで、生涯学習の機能がちえりあだけに集約するような課題は割と解決できるのではないだろうか。各地域に施設自体はあるようなので、後はそこにどう落とし込んでいくかという部分になるが、市内には社会教育を志す方々はたくさんいるように思うので、そういう方々に入っていただけならば、状況は前に進むのではないかと感じる（中野委員）。
- ・各地区単位でファシリテートができる職員を配置するとなると結構大きい規模になってくる。でも、もしそういう人がいれば、民生委員との連携や地域のコーディネートといった別の役割にも広がっていける可能性があるため、実現できると凄いいいと思う（今泉委員）。
- ・学校も社会教育と別々のものとして考えるのではなく、地域の中にある学校として双方をつなぐことで上手く包摂されればいいと思う（船着委員）。
- ・中々そこが難しいところ。公民館で学んでいる人がボランティアに行かず、ボランティアをやっている人たちが公民館に行かない。だから、その流れをつなぐ必要があるが、つなぐ人材がない。そう考えるとやはり職員や人材養成が大切だと思う（出口議長）。
- ・人材の配置によって地域をつないでいくという構成にすると、社会教育に限らず様々な分野の物事が動きそうに思う（今泉委員）。

イ 片岡副議長班

- ・地域差をなくし、すべての地域が活発になってほしいと思う。コロナ禍も明け、今は地域とつながることが一つのトレンドになっており、それが将来のメリットにつながるといことが伝わればよいと感じている。学ぶことや地域とつながることの楽しさが伝わってほしい。そのためには、誰もが参加しやすい環境であることが重要であり、小さい子どもがいることによる参加のしにくさや、移動の不自由さについては、オンラインの活用などによって解消していくことが必要だと考える。そして、教育の大切さについても、より広く伝わっていくことを期待している（齋藤委員）。
- ・教育委員会を擁護するという意図ではないが、教育の分野は政策として効果を明示することが難しいと思う。これは私見だが、例えば関連する公共事業と組み合わせることで、見え方が違って来ると思う。そういう意味でも、地域と関係を作りコミュニティを作っていくという方向性は大切だと感じる。最近で言えば除雪なども

挙げられると思うが、分野横断的に教育に味をつけてあげると良いのかなと思う（片岡副議長）。

- ・健康の維持についても教育が大きく関わっていると感じている。健康長寿を実現するためには、日頃からの知識や意識づけが重要であり、それらは教育によって支えられるものだと思う。結果として医療費や保険料の抑制にもつながる可能性があるため、そのような観点からも教育の重要性をより一層伝えていく必要があると感じている（齋藤委員）。

- ・地域差を無くしきれなかったとしても、その努力にどうアプローチできるかということは大事だと思う（片岡副議長）。

- ・社会教育関係団体について、他市町村では登録制度があるため、札幌市について調べてみたが、区民センターに登録している様子は確認できたものの、市として登録制度を設けているかどうかは不明であった。団体を把握することで、既存の活動の現状や各地域の活動量、地域との結びつきを合わせて把握し、それを活かしていけるような取組としていく必要があるように考えている。そのためには、コーディネーター的人材が不可欠であると思う。区民センターや地区センターが生涯学習施設と位置づけられているようなので、そのようなところに社会教育人材やボランティアを活用できればいいと思う。具体的には情報のネットワーク化や相談業務の充実が挙げられるが、個々の活動の網目から零れる人のいないよう、関連する活動同士をつなげることで様々な人々に伝えられればいいと思う（細川委員）。

- ・齋藤委員の話にも関連するが、社会に出た時に折れない人を育てていくにはどうしたらいいか、ということを考えなければならないと感じている。大きく社会問題にもなっていることであり、教育+αを考えるのであれば、社会で働く人の人材不足という部分につながっていくと思う。では子どもころから若者、大人になっても心が折れないためにはどうすればいいかと考えると、学校教育ももちろん大切だが、やはり地域のつながりや生涯学習、社会教育の果たす役割は凄く大きいと思う。皆が元気でいられる施策が大切だと思った（細川委員）。

- ・折れない人を育てるというところについては、学校で出来ることとそうでないことがあって、サードプレイスのようなものもあるが、どの部分を一緒に進めていくかという部分が大切。点と点を結び面にできるような人が細かく動けばもっと良くなると感じる（片岡副議長）。

- ・自分は敢えて少しネガティブな方向からアプローチして、先程の細川委員の表現にあった「零れてしまう人」の視点から考えたいと思う。第3次構想が2017年に策定されたということで、当時と今は大分状況が異なると考えている。国際問題も最近が多いため、まず先の見えない不安が一番にくる。ご高齢の方々は節約や貯蓄を意識し生涯学習どころではなくなるように思う。この不安に対し、生涯学習がどう払拭できるのかというところ。時間はあってもお金がない方々へのアプローチ、お金がなくても学べる仕組みをどう構築していくのかというところがポイントになるのではないと思う（榊委員）。

- ・経済的格差から考えると、未来へのアプローチにも大きく差が出る部分であるため、ケイパビリティをどう高めていくかという課題になる（片岡副議長）。

- ・地域差だけでなく経済格差にも向き合う必要がある。折れない人を育てるという点では、経済的に基盤を固めることで解決できる部分もあるかもしれない。そのため、教育にプラスする要素として、例えば生活保障や福祉という観点から一段掘り下げるような第4次構想になることが必要ではないかと考える（榊委員）。

- ・教育が為せる範囲をどこまで設定するかということが大切だと思う。教育で全てを何とかできるだろうと、詰め込んでいくと学校が疲弊してしまう。だから現実的

にどこまで教育が対応できるのかという $+\alpha$ をどこに設定するかは結構大きい話になる。絵に描いた餅で終わらないよう、現実的な最適解をどこに置くかは大事な視点だと思う（片岡副議長）。

・皆自分のために生きることによって精一杯であるけれども、「自分のためにやった結果、それが地域のためになった、学んだことが活かされた」、「自分のために頑張ったら周りの力を知ることが出来た」、となることもあり得る。まずは自分のために何かを学んでみようと思えるような機会が点在していることが必要だと思う。それによって、生きやすい社会やどこかにつながっているという感覚を育てていける。網目から零れてしまう人たちが居ていい場所、自分の居場所だと思えるような場所に、公民館のような施設が使われていけば良いと思う（桑原委員）。

・先日、北海道立生涯学習推進センターにて、道内の社会教育関係者が実践発表をする機会があり、自身もその中で発表を行ったが、凄く勉強になった。全道単位で開催できているため、札幌の中でもできればいいと思った。学校教育と社会教育の関係性について、学校と話す中では、社会教育がそもそも知られていなかったり、学校を通じた活動の周知が円滑に進まないことが多い。効率化とのバランスを考えつつ協力しながらどこまで進められるかは分からないが、互いに同じ方向を向いているという認識をもって進めていくことが大事であると思う（桑原委員）。

・学校は学校で精一杯な現状だと思う。今は働き方改革もあり、生活や健康を配慮することで昔とは異なる環境にある。その中でも社会教育との協働、互いに補い合いながら出来ることもあり、2～30年先を見ながら若い教職員に期待することもできる。ネットワークを作ったり活動を周知するという根本は恐らく変化しないが、新しい施策を作る際には変化させていかないとならない部分もある。そういう意味では「うらほろスタイル」が研究者の中では有名であるため、札幌市もそのようなネーミングがあってもいいかもしれない（片岡副議長）。

・「うらほろスタイル」とは？（齋藤委員）

・十勝の浦幌町で行われている施策のこと。地域と学校がかなり密接に関わっており、実践活動も多い。札幌市の規模で同じことをやろうとすると難しいところもあるが、例えば除雪の必要がある時に、大学生や高校生がボランティアでやっていたりと、政令指定都市で大きい街でこそあれど、こんな取組もやっているという光を当てられるような、それをもう少し言葉にできないかと思っている。言葉になれば心がついてくるため、日々の実践が変わらないとしても行政は推進しやすくなると思う（片岡副議長）。

・自分は大学の国際教育センター長を務めており、姉妹都市の大田（テジョン）広域市と関わる機会があった。大田はAIを始めとする科学技術において凄く有名な都市であり、様々な社会問題を抱える中、テクノロジーを活用して変化を起こそうとしている。部局は異なるが札幌市の国際部と連携しつつ、他都市の知見を得られれば国際都市としての一歩になるのではないかと思う（片岡副議長）。

・札幌は大きい街であるため、規模が大きい故に地域差があったり、他都市と比べてできないことも多いと思う（片岡副議長）。

・自分の住んでいる地域に愛着をもつというのは結構難しく、浦幌は高校が無くなったことをきっかけに、子どもたちに地元への愛着をもたせようと活動を始めた話を聞いたことがある（細川委員）。

・大人になってから急に始めるのではなく、子どもの時から関わっていかないといけない、というのはその通りだと思う（齋藤委員）。

・今すぐには変えられないことが多いと思うので、じわじわ長く育てると考えると、若い人たちに期待したい（片岡副議長）。

・学校と社会教育の連携について、コミュニティスクールや地域学校協働活動が進みにくい背景としては、学校側が負担増や疲弊を懸念している部分があると考えている。そうではなく、学校の負担を地域に少し預けてください、というスタンスにしていくと進むのではないかと思う（細川委員）。

・学校の先生は朝の挨拶から授業、子ども達の個別対応等をこなす必要があるが、先生も人間であるので、人間としての弱さを少し補填できるような仕組みを作らないといけない。色んな主体が互いにつながり合えるような運動ができ、ソーシャルキャピタルに確信をもてれば良いと思うが、中々難しい（片岡副議長）。

・人との折衝を怖がってしまうという声も聞こえてくる（齋藤委員）。

・例えば保護者、助け合うような形でつながれると、子どもの生活の一端を見て知ることができるため、とても良いことだと思う。人づくり、つながりづくり、環境づくりの3つに尽きるのではないかと思う（片岡副議長）。

・人の強さではなく、弱さをスタートにすることで、もっとつながることができるのではないかと感じる（榊委員）。

ウ 各班からの発表

(ア) 出口議長班（今泉委員）

・第4次構想に期待することをいくつかのカテゴリで分類し考えた。

・まず情報発信における広報の仕方という部分で、より多くの人にどう届けるかという視点で考えたときに、例えば大学生がSNSや動画編集といったことが得意であるため、サークル活動の一環のようなもので社会教育に関する動画の配信やパンフレット作成を依頼して、より多くの人目に触れる機会を作れるようにしたり、そもそも広報をきっかけに若者世代に社会教育に触れてもらうことで身近に感じてもらうような情報発信の多様化、若者世代に届くような具体的な何かを行うことが重要であるという話が出たところ。

・次に、環境整備という観点では、オンラインやオンデマンド形式での実施による、現役世代以外の方々も含めたフレキシブルな学習機会の確保や仕組みづくりが挙げられた。また、夕方や夜間の実施含めたご近所先生講座の拡大や、ボランティア活動の場の拡大といったところも話題になった。

・地域性という視点では、前回視察したような素晴らしい活動が行われている「ちえりあ」には、遠い地域の人が中々アクセスしにくいというところで、他施設の活用を視野に入れた環境整備が挙げられた。例えば、まちづくりセンターのような施設に地域や学校とのつながりをコーディネートできるような人材が配置できると良いのではないかと考えた時、やはり人材育成が非常に大事という話になった。より多くの市民の声やニーズを集約し、それを多くの人々が活用できるような機会を確保、そこから学びを深め人の交流や地域づくりへ還元していく流れができればいいのではないかという内容となった。

(イ) 片岡副議長班（片岡副議長）

・こちらのグループは、根本的に何が必要かという部分に迫った内容になったのではないかと思う。構想基本施策の、人づくり・つながりづくり・環境づくりに尽きるが、その部分について議論した次第。

・まず、生涯学習を考える上で、昨今の国際情勢を始めとして未来の見えづらい状況が根本にある。日々生きることが精一杯の方々やアクセスしにくい人達を可視化することが大切という意見があった。教育は人の弱さを支える仕組みを引き出すものでもあることを改めて感じた次第です。

・教育の予算や政策について、これまでも効率的に進めてきたものがあるかと思うが、それに留まらず、教育にコミュニティや生活保障、色々なキーワードを入れつつ総合的かつ複合的に進める契機となれば良いように思う。

・「うらかわスタイル」のように、札幌が行う取組を一言で表せるようなものがあれば良いと思う。例えば地域のための人づくりやつながりづくりを上手く表せる言葉があれば、非常に良いと感じる。

・つながりという意味では、今季の除雪に係る話もあるとは思いますが、都度柔軟に対応を変えていく必要がある中で、色んなところからヒントをもらって自分の中で理解をしてつなげていき、誰かのために使っていくということを循環させる、またはそれをAIやSNSを用いて可視化していくことができれば、良いと思っている。財産は人であり知恵であり、これまでのノウハウでもあると思うので、着実に同じことを突き詰めつつも、見栄えを含めて少し新しい施策にするのも一つだと思う。

・学校教育と社会教育の連携はもちろんだが、教育分野と他分野の協働を含めて進められれば良いという意見も出たところ。

(5) 今年度の協議に関する総括的な意見・感想

今回は今年度最後の会議であるため、出席した委員にまとめとして、今年度の総括的なご意見やご感想をいただいた。

【船着委員】

小学校の学校教育の立場から参加させていただいたが、社会教育というものに、こんなに色々な場や機会、方法があるのかと目を開いた1年だったと思う。義務教育課程は現在小中一貫した教育として、9年間のつながりを意識し系統性を保った教育を進めているが、自分自身はその先に社会教育があると思っていたところ、実は学校教育に横に常に社会があって、学校教育と社会教育が面につながりつつ学校教育の中にも社会教育が加わってくる。そういった場により変化していけばいいと思うし、コミュニティスクール等をきっかけに地域と学校がつながってより良い学校教育となりつつ社会教育を受けた方々の活躍の場にもなる、そんなものが実現していけばいいと感じた。

【今泉委員】

家庭教育の部門から参加させていただいており、普段は自分の幼少期の育ちの傷等を原因として人生や子育てが思うようにいかない保護者や、傷つき転びながらも自立に向かおうとする子供たちと接することが多いため、その立場から見ると、社会教育を考える場合は、プラスをよりプラスにするという方向で考える場のように感じられ、非常に自分にとって勉強になった。自分らしさや長所をより押し上げていく、地域にも寄与できる人材を札幌市としてどう育てていくかという視点は普段考えたことの無いもの。一方で今関わっている人々も自分らしくやっていけるチャンスを生み出せるような仕組みを、社会教育の中で考えていけたらいいなと思った。

【中野委員】

公募で参加させていただいております。民間で40数年間、会社生活を歩んだ上での社会教育ということであり、昨年初めて社会教育士の称号を受け、初めての仕事がこの会議ということ、1年間貴重な経験をさせていただいた。全4回の内3回のみでの参加となったが、できればもう少し回数があってもいいと思うくらいであった。この話し合いの結果が、札幌市の社会教育行政に多少なりともお役に立てれば幸いです。自分は毎日、北海道神宮へ参拝を兼ねてウォーキングを行っており、神宮の手水

の周りには毎月和歌が飾られているが、今月の和歌を詠ませていただきたい。「たちねの 親の教へは だれもみな 世にあるかぎり 忘れざらなむ」というもの。やはり教育の原点、基本は家庭教育かと思う。ただその一方で、学校教育を取り巻く環境が厳しい今だからこそ、学校教育と家庭教育を繋ぎ紡ぐ、社会教育の果たす使命や責任というのは重いのではないかと受け止め、これからも精進してまいりたい。

【桑原委員】

今年度から新任で参加させていただいて、自分に何ができるだろうと考えていたが、私も昨年度社会教育士の称号を得て、自分の経験や人脈がものすごい価値になることを実感した。現代は高収入や高学歴、効率化を求められていて、人を育てることが重視されがちであるが、私達が思う気持ちやそれまでの歩みの価値を伝えられるのは、この社会教育士なのではないかと思っている。だから、今後は自分を卑下せず活動を伝えていければいいなと思う。

【榊委員】

私と社会教育の出会いは、議論にも出てきた「人間の弱さを支える仕組み」ということで、南区の「むくどりホームふれあいの会」さんとの出会い、それから2007年に活動が始まった、月寒にある「ねっこぼっこのいえ」との出会いがスタートであった。どんな人も自分らしく人間の尊厳をもって生きていけるような社会にするためにはどうしたらいいかということの研究のテーマに、社会教育と特に地域子育て支援拠点事業を中心に研究してきた。この1年間の感想としては、まず「熟議」のありがたみを実感しており、議事録もかなり厚みが増しているのではないかと考えている。2つ目に、「内容と方法との連関がある」ということ。即ち方法が変わると内容も変わってくるということ学んだ。3つ目に、循環と繋がりを生み出す仕組みをどう作っていくかが、今後の課題ではないだろうか考えた。

【細川委員】

私は北海学園大学で社会教育主事の養成をやっている関係で参加させていただいているが、皆様のそれぞれの視点であったりご経験が大変豊かで、色々な方向性で学ばせていただいた。札幌市は大きい街であるということを実感する委員会、会議でもあった。学校も多く地域も様々で、何かをしようとしても中々難しい面があり、何から手を付ければいいのか考えることもあった。けれども皆様からお話をお伺いしていく中で、その難しさもある一方、豊かさも凄くある地域だなとも感じている。ちえりあ、ちえボラの話もそうだが、多くの積み重ねの中で、今ある地域の資源を活かしていけるということは自信をもって言えると思う。現代は社会情勢も大変不安定、生活面での困難さが大きくなる中で、社会教育や生涯学習なんてやってる場合じゃないという声もあると思うが、そういう時だからこそ、社会教育や生涯学習の出番だという風に私は考えているので、その考えのまま、来年度の第4次生涯学習推進構想の策定に進んでいきたい。

【齋藤委員】

私は今年度公募として参加させていただいた。皆様が自己紹介されている中で、自分は名刺を持たない、何者でもない自分ということを実感させられた。ただそんな一市民の自分の意見を、このような会議の場で皆様が尊重してくださり、色々聞いてくださって、とても良い会議だと思った。社会教育委員として1年目の今年度は、社会教育としての生涯学習や地域活動について、多くの方々と意見を交わしながら

ら考える貴重な機会をいただいた。特に印象に残っているのは、それぞれの考えを出し合い、整理しながら議論を深めていくというこの熟議の過程であり、立場の異なる方の視点に触れることで社会教育の広がりや可能性を改めて実感できた。私は4人の子どもを育てながら、学校で外国にルーツのある子どもたちの日本語支援にも関わっているが、子どもの頃から親子で地域の講座や活動などに参加する機会や経験があれば、地域に関わるのが特別なことではなく、自然なこととして感じられる家庭環境が育つのではないかと、改めて今回感じたところ。そうした経験の積み重ねが、大人になってからも自ら学びの場を見つけ、生涯学習を続けていく力につながるのではないかと思う。そして同時に、孤立や孤独を防げるのではないかとも思う。また、前回会議にてちえりあを見学した際、こんな素晴らしい活動をされているところがあると知ることができた一方、札幌市内での施設の場所や交通手段によって参加のしやすさに差が出るということも感じた。区民センター等身近な場所で、オンラインやAI等を活用しながら、より多くの方が社会教育に触れるきっかけを作っていけるといいと思う。来年度も市民の立場から、誰もが身近なところで学びや地域活動に関われる環境について考えていけたらと思う。

【片岡副議長】

大学では講義で社会教育法や社会教育のできた経緯について教えているが、実際に色々関わっていると、やはり人のつながりがあったり、コツコツ見えないところのつながりがあるのではないかと思う。これまでも社会とは何だと考えながら社会教育が始まり今に至る訳だが、恐らくこれからも「社会」という言葉の意味は変わっていくのだと思う。その時に、一丁目一番地の「誰のためにやるのか」という部分は、生活が厳しい方たちのことも考慮しながら意味を深めていく必要がある。つまり私たちの活動というのは短期的ではなく50年後、100年後に「あの時こういう議論があったからこうなってきた」となるのではないかと思っている。そのため、今現在のことを進めながらも次の世代へバトンをどう託すのかを思いながら議論しなければいけないと思っている。先程の熟議の際に話した内容で、札幌の姉妹都市である韓国の大田は非常にAIインターネット等の科学技術が盛んな町であり、そのような他都市の知見を生かすことで、札幌ならではのことができるのではないかと考えている。そのため、教育への+αとして札幌ならではの要素も入れつつ、まちづくりやコミュニティ作りを進めるにあたっては国際的な要素を参考にできるといいと思っている。

【出口議長】

今年度は最初、社会教育のそもそも論を私からお話させていただいてスタートしたところ。私自身、社会人になって45年目、社会教育には40年程関わっているかと思うが、そんな人生の中でも、1年間かけて本当の基礎から皆様方とお話ししたという年は他になかったような気がしている。その後3回の会議でも、やはり生涯学習ってなんだろう、社会教育ってなんだろうというような思いを皆様と共有しながら、講座を受けるだけではなく、色々なものが生涯学習、社会教育の要素に含まれているということを改めて認識させていただいた。議論の中でも沢山出てきたが、コロナ禍が明けてオンライン会議が普及していく中で、生涯学習、社会教育の在り方もやはり変わってきているんだらうと思う。施設に行かないと学べないのではなくて、自宅にいながらオンラインで、それからオンデマンドという形式もあって、24時間いつでも学べるという機会があるからこそ、時代に合わせた生涯学習、社会教育というものをこれから考えていかなきゃいけないと思っている。それからもう一つ、自分は今旭川市民であるが、毎月のようにちえりあに出かけ、活動の様子を見させていただいている。

前回の視察のように実際に説明を聞くと、やはり素晴らしい講座をやっておられるということを実感した。しかし、ちえりあが頑張っているのだから、他の施設ももう少し頑張ってもらいたいと思う。ハード面の環境はそれなりに整っているからこそ、後は人材育成をどう進めていくかによって、札幌市の生涯学習、社会教育はもっと元気になっていくのではないかと、改めて可能性を感じた次第。今年度の議論を踏まえて、来年度はいよいよ皆様方と一緒に、第4次構想に何を盛り込むかを話し合っていく場になる。来年度が本番であるため、是非、積極的な発言をいただけたらと思う。

(6) 連絡事項

令和8年度については、社会教育委員にて構成される「(仮称)札幌市生涯学習推進構想検討会議」を組織し、第4次構想の策定を本格的に進めていく予定。今後のスケジュールについては、改めて事務局から連絡する。

(7) 井上総務部長、出口議長より挨拶

今年度最後の会議となるため、事務局を代表し井上総務部長より挨拶。また、社会教育委員を代表し、出口議長よりご挨拶をいただいた。